

## 2. 寄稿：共に生きる社会に向けて

(星槎大学大学院教授 細田満和子)

私は社会学を専門とし、医療・福祉・教育の領域を横断しながら、人びとの生きづらさや社会的排除、そしてそれに抗う実践について研究と実践を行ってきました。慢性疾患や障がいのある人びと、患者会やピアサポートの場、教育や専門職養成の現場に注目し、「支援される側／する側」という固定的な関係を問い直すことを一貫したテーマとしてきました。

とりわけ重視してきたのは、当事者が自らの経験を語り、意味づけ、他者と共有するプロセスです。そこでは、専門知や制度によって一方的に規定される存在ではなく、社会を構成する主体としての人びとの姿が浮かび上がります。私はそのような実践を社会的に記述し、理論化し、再び現場へと還元することを自らの役割だと考えてきました。

近年、日本社会において外国人排斥やヘイトスピーチ、排他的な言説が可視化されつつあることに、私は強い危機感を抱いています。これらの言説は、「治安の悪化」や「文化の違い」「社会保障の負担」といった言葉と結びつき、外国人という存在そのものを問題化する形で語られがちです。しかし社会構造の観点から見ると、そこには重要な歪みがあります。

とりわけ注目すべきなのは、外国人へのヘイトに満ちた言説の多くが、実際に外国人を隣人として日常的に知っている人びとではなく、外国人とほとんど接点をもたない、地理的にも心理的にも離れた位置にいる部外者によって発信・拡散されている点です。SNS や匿名的な言論空間では、具体的な顔や生活をもたない「抽象化された外国人像」が作り上げられ、不安や怒りのはけ口として消費されていきます。

この構図は、私が医療や福祉の領域で見てきたスティグマや排除のメカニズムとよく似ています。実際の当事者と関わらないまま、遠くからラベルを貼り、問題を単純化することで、複雑な社会課題があたかも特定の人びとの責任であるかのように語られてしまうのです。その結果、本来向き合うべき雇用の不安定化や地域コミュニティの希薄化、社会保障制度の歪みといった構造的課題は不可視化されていきます。



私はこれまで、海外の研究者や実践者と協働する中で、日本人として、あるいはアジア出身者として、明示的・非明示的な差別に直面する場面を見聞きし、また経験してきました。発音や言語能力を過度に問題視されたり、能力とは無関係にステレオタイプで評価されたりすることは、決して特別なことではありません。重要なのは、差別が抽象的な理念の問題ではなく、日常の相互行為の中で具体的に立ち現れる一方で、対話や協働を通じて関係性が変化するという点です。差別は固定されたものではなく、人びとの関わり方によって再生産も克服もされる社会的過程なのです。

私が考える共生社会とは、「同じになること」や「違いを消すこと」を目指す社会ではありません。違いが存在することを前提に、その違いを抱えたまま、日常生活をどのように共に成り立たせていくのかを、地域レベルで実践的に模索し続ける社会です。

実際の地域では、外国人住民と日本人住民が、学校、職場、自治会、医療や福祉の現場などで、試行錯誤しながら関係を築いています。ゴミ出しのルールや子どもの教育、言語の壁などは摩擦を生むこともありますが、同時に相互理解を深める契機にもなっています。重要なのは、外国人も日本人も、ともに地域をつくる当事者であるという点です。

専門職集団の一員として私が強調したいのは、外国人排斥やヘイトの言説が、現場から切り離された部外者の言葉として流通している一方で、地域の現場では当事者による共生の実践がすでに積み重ねられているという事実です。

専門職の役割は、こうした当事者の実践を可視化し、支え、歪められた言説に対して現場に根ざした言葉で応答することにあります。共生社会は、遠くから論じられる理想ではなく、具体的な他者と出会い、失敗を重ね、対話を続ける中で形づくられていくものです。私は今後も、当事者の声と実践に立ち会い、それを社会に伝え返す媒介者であり続けたいと考えています。



補：寄稿のバックナンバーは <https://www.japa.fellowlink.jp/professional> に掲載